

業績説明書

候補者名：内田 由紀子

所属機関名：京都大学 こころの未来研究センター

Uchida, Y., & Norasakkunkit, Y. (2015). The Neet and Hikikomori spectrum: Assessing the risks and consequences of becoming culturally marginalized. *Frontiers in Psychology*, 6:1117. doi: 10.3389/fpsyg.2015.01117

要旨

グローバル化が進む中で顕在化してきた、文化のメインストリームからの逸脱としてのニート・ひきこもりの心理・行動に着目し、研究1ではその共通特性をスペクトラム次元として検証する尺度(NEET-Hikikomori Risk Factor: NHR 尺度)を開発した。NHR スペクトラムにはフリーター志向性、低い自己効能感、将来目標に対する不明瞭さの3つの要素が見いだされた。研究2では日本の若者(20歳~39歳)を対象とした大規模調査(N = 7725)を用いて、NHRが学歴ならびに職業形態と関連することを検証し、社会経済的な要因との関わりがあること、また、政府によるニート・ひきこもり定義との関わりを考察した。

Uchida, Y., Takahashi, Y., & Kawahara, K. (2014). Changes in hedonic and eudaimonic well-being after a severe nationwide disaster: The case of the Great East Japan Earthquake. *Journal of Happiness Studies*, 15, 207-221.

要旨

震災前後(2010年12月と2011年3月末)での日本の20代、30代の若者(N = 10,744)を対象とした大規模なパネル調査を分析した。被災地以外の若者の約半数が震災後の自分の幸福の判断の際に震災のことを思い浮かべたと回答しており、その群では悲しみの増加などの短期的な感情経験の変化だけではなく、よりグローバルな幸福度はむしろ上昇する傾向にあったことを示した。また、全体的には日常的な他者とのつながりを再評価するような価値観の変化を経験した人が多く、その程度が震災後の幸福度評価に影響したこと(震災後に日常的な価値を再評価した人ほど、震災後の幸福度が高かったこと)を見いだした。

Uchida, Y., Ueno, T., & Miyamoto, Y. (2014). You were always on my mind: The importance of “significant others” in the attenuation of retrieval-induced forgetting in Japan. *Japanese Psychological Research, 56*, 263-274.

要旨

記憶研究における「検索誘導性忘却」（ある手がかりに基づいて特定の記憶情報を想起すると、その記憶情報と関連しているが想起されなかった事柄についての検索可能性が減少する）という現象に着目し、その境界条件についての文化差を検討した。西洋での先行研究(Macrae & Roseveare, 2002)では、「自己」に関連づけて記憶するときのみ検索誘導性忘却が消失する「自己の耐性効果」が見いだされていたのに対して、日本では重要な他者（家族）も自己と同様に忘却耐性の要因となることを検討し、記憶領域において、文化的自己観が影響していることを示した。

Uchida, Y., & Ogihara, Y. (2012). Personal or interpersonal construal of happiness: A cultural psychological perspective. *International Journal of Wellbeing, 2*, 354-369.

要旨

文化と幸福感がどのように関わっているのか、(1) 幸福の意味 (2) 幸福の予測因 (3) グローバル化による文化の変化と幸福への影響、の3点についてレビューした。北米では個人内の特性の望ましさを最大化した状態として幸福が定義されるのに対して、日本において幸福は他者との調和や人生の中でのバランスを重視して幸福が定義される傾向がある。さらに、個人主義化してきた日本においても関係性は重要な幸福の基盤となっている (Ogihara & Uchida, 2014) という実証的知見を元に、文化の変化と心の変化の関係へと論を展開した。幸福という普遍的なテーマにおいて、文化心理学的知見から論じることの重要性を述べた。

Uchida, Y., & Kitayama, S. (2009). Happiness and unhappiness in east and west: Themes and variations. *Emotion, 9*, 441-456.

要旨

「幸せ」の意味の素朴理論について日米比較研究を行った。研究1では日米で幸せについて5つまでその原因や結果を含めた「意味」を記述してもらった。研究2では、研究1で得られた記述を別の群に分類してもらい課題を行い、その結果をもとに多次元尺度法を用いて内容のカテゴリーを検討した。結果、北米やヨーロッパでは個人の達成が、日本では関係性の調和が、それぞれ幸福な感情状態とより関連していた。また、日本においては「無常観」や「社会的ネガティブさ」など、幸せの「負の側面」が意識されており、その数は得られた記述全体の3割近くとなっていた。これに対し、アメリカではこれらの負の側面はほとんど見られず、文化により幸福感の意味に共通性と差異があることを示した。